

天草洋に泊す

頼山陽

雲か山か呉か越か

水天髻青一髪

万里舟を泊す天草の洋

煙蓬窓横たわす日漸く没す

瞥見す大魚の波間に躍るを

太白船当って明月に似たり

【作者】 頼山陽（一七八〇〜一八三二年）（安永九年〜天保三年）・名は襄（のぼる）、字（あざな）

は子成、号は山陽。大阪江戸堀に生まれた。父春水は安芸藩の儒者。七歳にして叔父杏平について書を読み、十八歳で江戸に遊学した。二十一歳京都に走り脱藩の罪により幽閉される。後、各地を遊歴し、天保三年九月病のために没。年五十三歳。著書に「日本外史」「日本政記」「日本楽府」等がある。

【語釈】 \*呉・越：中国の春秋時代の国名。 \*髻・髻：かすかにほんやりと見えるさま。

\*青一髪：髪の毛一筋ほどの青さ。 水平線を表した語。 \*篷 窗：舟の窓。

\*瞥 見：ちらりと見える。 \*太 白：金星。

【通釈】 海上に遠く見えるのは、雲だろうか、山だろうか、それとも呉の国だろうか、越の国だろうか。海と空とが接するあたりに、かすかに髪の毛一筋ほどの青いものがほんやりと見える。

万里のかなたに広がるこの天草の洋に舟を泊めているが、夕もやが舟の窓のあたりにたなびいて、太陽はしだいに西の海に沈んで行く。

そして、一瞬、大魚の波間にはねる姿がちらりと見えた。空を見上げると、宵の明星が舟の正面に明るく輝いて、月よりも明るかった。